

中口国境画定に学ぶ 領土問題

法政大学社会学部講師 堀江則雄

はじめに

ユーラシアの大国、ロシアと中国は21世紀に入って、長年、紛争と対立の源となってきた4300kmの両国国境を画定し、戦略的協力関係を飛躍的に発展させている。中国と中央アジア三か国（カザフスタン、キルギス、タジキスタン）との国境も画定し、ユーラシアを分断してきた7300kmにわたる中口（ソ）国境地帯を安定と協力のゾーンへと変えた。歴史的にみれば、帝政ロシアがシベリアと中央アジアに進出して以来の分断と対立の構図に終止符が打たれ、かつてのユーラシア大交流圏の復活へとつながる兆しが見えてきたのではないだろうか。

分断と対立の歴史

ロシアはシベリア、中央アジアへの進出・領土拡大によって「ルーシ」から「ロシア」となった。ロシアは清と1689年、両国の国境を初めて分けるネルチンスク条約に調印。その後のシベリア進出をうけて1858年のアイグン条約でロシアがアムール川左岸以北を獲得し、ウスリー川以東の日本海までの土地は両国の共有とし、1860年の北京条約でウスリー川以東の沿海地方をロシアが領有した。一方、中央アジアでも1881年のイリ条約によって、ロシアと清の勢力を分ける境界が定まっている。今日の両国国境の大枠はこれらの条約によって決まったのである。

それ以降、1920年代のシベリア内戦による国境地帯



ポリショイ・ウスリースキー島とタラバロフ島
出典：堀江則雄『ユーラシア胎動——ロシア・中国・中央アジア』岩波新書 2010年



ハバロフスクとポリショイ・ウスリースキー島を結ぶ連絡船
ハバロフスクからロシア人たちが水浴びにやってくるなど、市民らの交流はさかんだ。

での軍事紛争、さらに1930年代のソ満国境でのソ連軍と関東軍との軍事衝突、1945年8月のソ連軍の満洲侵攻などで国境地帯の変更があった。とりわけ、こうした軍事紛争でロシア側が国境河川であるアムール川、ウスリー川の多くの河川島を領有してきたのである。

中国共産党が1949年に権力を樹立して以後、中国は公正かつ対等な国境の画定を求めた。“左派”を中心に、中国人が主要居住者であったウスリー川以東の広大な領土の返還を求める声が強まったが、中国政府の公式方針には含まれなかった。

中口（ソ）両国は1964年、国境交渉を開始した。その際、①それぞれの国境地図を交換し、30を超える地区、面積3万4000km²が係争区域と判明 ②今日も有効な過去の条約、合意を基礎にして国境線を双方が確認することで領土帰属を明確化する ③国境河川にある河川島の帰属は、国際法に準じて主要航路の中間線を国境線として決める ④モンゴル国境の東端から北朝鮮までの東部国境、モンゴル西端からアフガニスタンまでの西部国境と分けて交渉を行う——ことが合意された。

しかし、交渉は両国共産党の路線対立、中国の「文化大革命」によってすぐに中断。1969年には、国境をめぐりウスリー川のダマンスキー島、新疆ウイグル自治区のイリ地区で両国の武力衝突が発生、戦争寸前の緊迫した事態にまでなった。国境地帯には双方が大規模な兵力を配置し、緊張と対立のゾーンとなった。

段階的、互恵、相互信頼

ソ連のペレストロイカと中国の改革・開放路線のなかで1987年、国交が正常化され、外務次官レベルで国境交渉が再開された。その際、1964年の合意を交渉の基礎とすることになった。それは1860年の北京条約など国境条約を基礎にして係争地区を国際法に準じて解決

していく合意であり、国境交渉をまとめる基盤になった。

まず第一に、双方の国内路線にとって長い国境地帯の安定が何よりも必要だった。そのために、双方の信頼醸成に努める手法、そして食い違う点は先送りし一致できる点をまず合意する段階的手法を取った。

両国は1990年4月、「国境地帯の兵力削減及び信頼醸成協定」に調印、国境地帯から双方の軍隊を撤退させて、緊張の緩和と相互信頼を強めた。

これをうけて1991年5月、東部国境画定協定に調印した。この協定は第一条で「一般国際法規範に応じて、公正かつ合理的に国境問題を解決し、国境線を決定する」とし、ここから具体的な国境線の画定作業に入ることになった。だが、同年12月のソ連解体をはさんでロシアの混迷がつづき、作業はまったく進展しなかった。

ロシア極東の地方指導者からは領土譲歩に反対する声、大きな人口格差による中国人のシベリア・極東への膨張の懸念などが出たが、両国の政治指導者は国境画定によって両国の戦略的協力の進展をすすめるのが国家的利益にかなうという政治的意志を揺るがさなかった。

いくつかの係争地区で紆余曲折はあったものの、エリツィン大統領と江沢民主席は1997年11月、東部国境画定の完了を宣言し、「21世紀に向けた戦略的パートナーシップ」共同宣言に署名した。これによって、4300kmの国境の98%が画定し、両国関係は友好的な協力関係にまで格上げされた。

ソ連解体をはさんで6年間の交渉で、合意できる地域を積み重ねて画定作業をほぼ完了させたのである。最後まで合意できなかったのは、アムール川とウスリー川の合流点にあるボリショイ・ウスリースキー島と隣接のタラバロフ島、そしてアムール川上流につながるアルゲン川のボリショイ島の3島だった。

中ロ国境の大半を占める国境河川の河川島の帰属では、ロシアに1163の島、中国に1281の島となった。ほぼフィフティ・フィフティの形だが、ほとんどの島はロシアが実効支配していたので中国側に引き渡されることになった。例えば、1969年に武力衝突が起きたウスリー川のダマンスキー島も中国に帰属した。

係争島の分割

3つの島の帰属をめぐる争いは、激烈をきわめた。とりわけロシア極東最大の都市ハバロフスクに面するボリショイ・ウスリースキー島の帰属の「解決は困難だ」とされた。淡路島の半分にも匹敵する面積のこの島は、中国にとっては主要航路の中間線の自国側にあ

ると見ていたが、ロシア側にとっては戦略的要衝の島だったのである。

両国政府が取った方針は“急がば回れ”だった。つまり、両国関係を抜本的に強化して相互信頼を強めることだった。プーチン・江沢民両首脳は2001年7月、中ロ善隣友好協力条約に調印した。この条約は、多極世界・公正な世界秩序、国際政治での共同協力をうたい、全面的な互惠の両国協力関係の推進を誓約している。両国関係が正常化して以来の最高の到達点であった。

この条約で注目されたのは、第六条で領土要求、請求権が相互に存在しないと確認していることである。この条項は、3つの島の帰属を決定するうえで大きな役割を果たした。というのは、①1997年に画定した国境線が最終的なものであり、今後いっさい領土要求しないと誓約している ②沿海地方などは本来中国領だった、中国国内でかつて主張された領土要求が公式に放棄された——からである。

そして両国は2004年10月、帰属未決の3つの島をそれぞれ折半することで合意に達し、東部国境画定追加協定に調印した。ボリショイ・ウスリースキー島と隣接のタラバロフ島を合わせて、ハバロフスク側半分をロシア領とし、西側半分を中国領とした。ボリショイ島も半分に分けた。いずれもロシアが実効支配していたから、島の半分を中国側に引き渡すことになった。

2008年10月、両国は東部国境の合意にもとづく線引き、国境標識の設定を終えて、地図上だけでなく、現地でも国境を画定させた。

おわりに

1964年に開始された中ロ（ソ）国境交渉は、長期間の中断をはさみながらも40年間をかけて最終合意に達した。双方が受け入れる国境線が歴史上初めて画定したのである。国境の画定は壁をつくるのではなく、逆にそこから分断の壁が壊れてヒトとモノの奔流が始まっている。このユーラシアの地において、その意味は大きい。

この国境交渉で特徴的だったのは、冷えた両国関係から全面的な関係の発展、相互信頼や互惠の進展に応じて、段階的に最終画定にたどり着いたこと、そして段階的に国境が画定するに応じて両国関係の互惠的発展、相互信頼が高まっていったこと、さらにその際に両国の政治指導者の確固とした政治的意志が貫かれたことである。

両国の段階的な歩み寄りの姿勢は、今日の国際社会が抱える種々の領土問題に多くの示唆を与えるだろう。